

輪島市における能登半島地震からの復興

指導教員	金沢大学	教授	大友信秀			
参加学生	2年	加藤空芽	海老原司穂	平田仁崇	比良旺介	樋口耕作
		ハモンド善	古木健勝	山本爽太	千明蒼季	
	1年	片田陽心	根井紗栄子			

地域団体への謝辞

地域の皆様には、日頃より私共の活動を温かく見守っていただき、心より感謝申し上げます。皆様の細やかなお気遣いや、復興ボランティア活動の基盤作りや、輪島での宿泊施設等の提供サポートといったお力添えがあるからこそ、私たちは安心して活動を続けることができいております。地域の絆を大切に、これからも共に歩んでいければ幸いです。いつも本当にありがとうございます。

のと復興支援 station 関連 QR

のと復興支援
station



Instagram



X



1. 活動の要約

仮設住宅ではコミュニティ形成が困難な状況にあり、地域振興の遅れにもつながっているため、地域コミュニティを再結成し、地域による能動的な震災復興支援を支援する。

2. 活動の目的

輪島に関係する情報やニュースを中心に作成した情報誌を金沢に存在する能登復興支援ステーションにて配布することによって観光客や加賀地方の住民の、能登に対する関心を高め観光や義援金という形で能登地方の復興を支援する。

3. 活動の内容、成果

まず、5月ごろに輪島にあるいくつかの仮設住宅をまわるフィールドワークを行った。その結果、各々の地区長さんが自治を任されており、それぞれがそれぞれのやり方で統治しているのが分かった。また、お互いに連絡を取り合うということもしていないため、それぞれがバラバラの状態で大乱立しているという状態であった。この状態では復興がバラバラになり、お互いが協力しあってより早く復興する事ができないと考え、私たちは情報誌の作成をすることで地域のつながりを作ろうと考えた。

また、輪島では朝市の規模もかなり縮小してしまったため観光客が減少し、スーパーも一つを残してほぼ活動できておらず、海も閉鎖して販路も縮小していた。つまり、経済活動もほぼ行われておらず、お金そのものが輪島にないということも分かってきた。このことから、輪島への義援金を募ることもまた課題として見えてきた。

この課題を解決するために、我々は石川県の玄関口である金沢駅の「あんと」において能登半島の商品を販売することは、復興支援と地域の魅力発信の両面で大きな意義があると考え、地元で和菓子屋を営んでいる中浦屋さんと共に、金沢駅で能登復興支援ステーションという店舗を共同で運営することになった。

まずは、情報誌について書く。前に記した通り輪島での聞き込みをしたが、この時はほぼ取材をするのが困難な状況であった。一つの仮設住宅地の中に様々な場所からの被災者が敷き詰められている状態であった。そのため、隣の住民と来た地域が違っていると話をしないという人がほとんどで、そもそも仮設住宅内でのつながりが希薄であるが故に外出する人がおらず、また、私たちがドアを叩いても返事が返ってこず、宗教勧誘だと思われ、すぐ追い払われることが多かった。この結果を踏まえ、インタビューによる情報収集と、輪島向けの情報誌を出しても受け取ってもらえない事が難しいと考えた。

輪島市内に情報誌を流通させる事を一度諦めて、金沢駅での「あんと」での販売と絡めて、あまり知られていない輪島の現在を知ってもらうためにも、店舗内で情報誌を頒布することにした。駅内は金沢の中でも人が多く出入りしているため、ここで試験運用してみて、輪島で作る時のポイントなど



を押さえる目的も含めていた。

実際に行ってみた結果、さまざまな困難が出てきた。まずは、輪島の情報量についてだ。最初は色々なことがあると思ったが、どこも震災で崩れており人がおらず、基本的に震災の恐ろしさ、それがもたらす影響以外に出てくる情報が見つからなかった。また、地元の人インタビューも非常に難しかった。そもそも情報誌を受け取ってもらうことが難しいような状況で、インタビューなど受けてもらえるはずもない等、多く課題があると初めて分かった。結局、私たちが輪島に行って受けた印象や、復興具合などを中心に作成活動を行った。

完成したものを金沢駅で頒布することでも壁にぶつかった。これは金沢駅にいる人々の特徴を捉えれば一目瞭然だが、彼らの大半が出張や帰省などで新幹線等を利用し金沢に来る、または金沢から出る人々であるということだ。このような人にとってそもそも立ち寄って話を聞く時間はなく、情報誌に抱く興味も少なかった。そのため、フィードバックを得ることに非常に苦労した。

次に能登復興支援 Station における活動を報告する。本活動では、能登半島で生産・製造された食品や加工品などを中心に販売を行った。観光客が多く訪れる立地を活かし、商品それぞれの魅力を伝える POP を設置することで販売促進を図った。また、商品を購入していただくことが復興支援につながることを分かりやすく示した。さらに、来店客からの義援金を集めるコーナーを設置し、多くの人が復興に貢献できるようにした。その結果、多くの来店客が能登の商品に興味を示し、実際に手に取って購入する様子が見られた。お客様からは、「能登半島に行かなくても支援でき、特産品を楽しめるのが良い」「以前から欲しかった能登の商品が金沢駅で購入できて嬉しい」といった声を多くいただいた。また、商品をきっかけに能登半島の現状について会話が生まれる場面もあり、復興に関する情報発信という点でも効果が確認できた。一方で課題として、売れる商品に偏りが生じてしまった点が挙げられる。1日に複数個売れる商品がある一方で、販売期間中にほとんど手に取られず、販売可能期間を過ぎてしまう商品もあった。来店客の関心を引くための商品配置や POP の設置方法について、より工夫が必要であると感じた。今回の能登復興支援 Station での活動は1月で終了するが、本活動を通じて、能登半島の復興には、長期的な支援と関心の継続が不可欠であることを改めて認識した。今後もこのような取り組みが様々な形で継続されることが、能登地域の復興につながると考える。

4. 今後の活動計画

本活動を通して出てきた様々な問題に対して対応策を出した上で、実際に輪島で情報誌を発刊しようと検討している。また、本活動から情報誌の作成・展開が想像以上に難しい事がわかったため、別のアプローチを考えて地域コミュニティを構築することも視野に入れている。

5. 活動に対する地域からの評価

1. 被災地の状況は刻々と変化し、その都度、適切な対応が求められる。地域だけでは現状把握が難しいところ、住民の知見をもとに現場を駆け回り情報を聞き取り、情報誌に置き換え配布する活動は、非常にありがたく感謝している。派手さはないが、今後も地域にとって重要かつ継続が求められると考える。また、発災後多くのボランティアの支援があったが、その要請と数も少なくなっている。それを経て、今後は近隣で被災地に寄り添うような活動が求められる。そんな視点から、地域の現状を把握するにとどまらず、多様なボランティア活動を行ってくれた学生には、今後さらに住民に寄り添う活動を期待している。

2. 様々な事を考えて行動に移している事は良い点であるが、そのせいでキャパシティを超えて結局一つ一つがおざなりになってしまっている。やる事を絞り、一つ一つをしっかりとやり遂げられるようになる事を願っている。